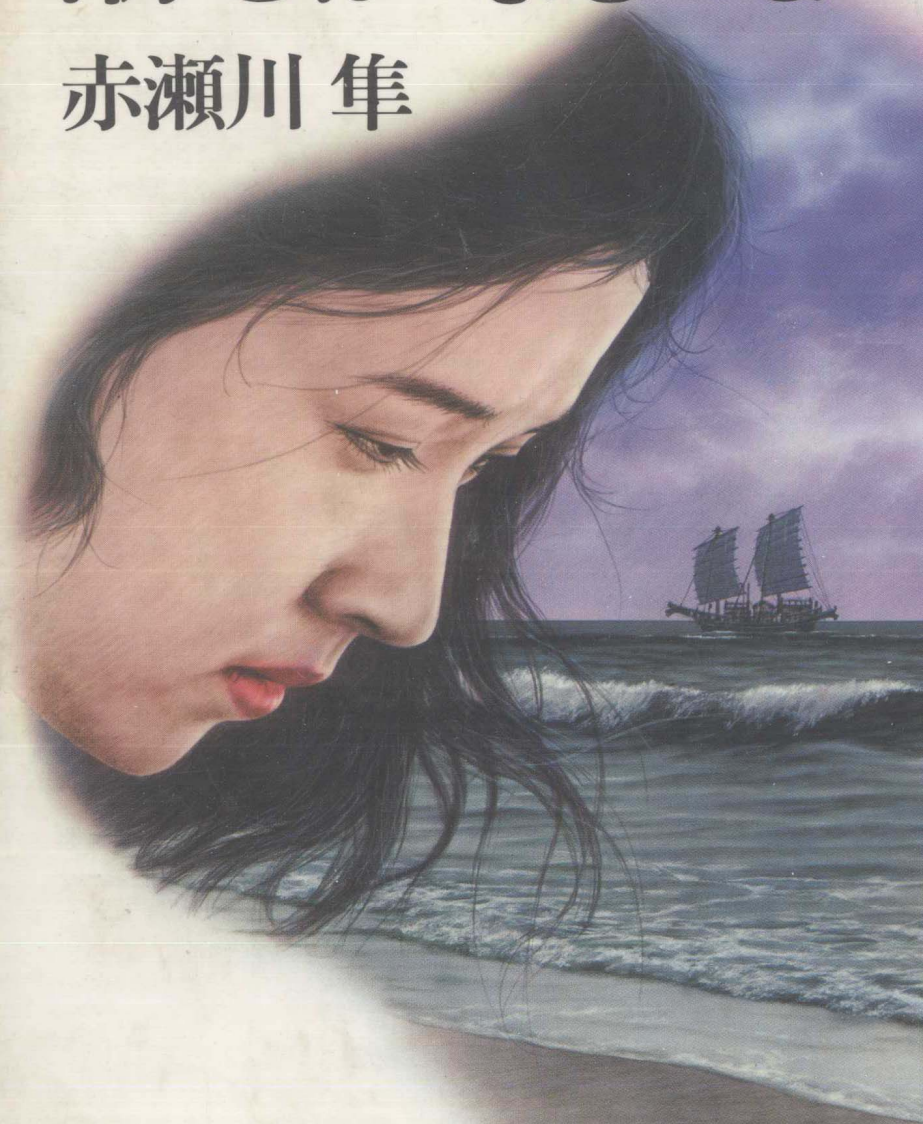


潮もかなひぬ

赤瀬川 隼



文藝春秋

潮もかなひぬ

赤瀬川 隼

© Shun Akasegawa 1985
Printed in Japan

潮もかなひぬ

一九八五年六月二十日第一刷

定価 一二〇〇円

著者 赤瀬川 隼

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(〇三)二六五―二二二一

印刷 共同印刷
製本 中島製本

万一落丁・乱丁がありましたらお取替えします

潮もかなひぬ

A 装
D 画
坂 藤
田 居
政 正
则 彦

目次

一	天離る夷 あまざか ひな の荒野に	5
二	韓人 からひと の衣染むとふ ころもそ	63
三	情 こころ もしのに古思 いにしへ ほゆ	83
四	三輪山を然 しか も隠すか	107
五	玉裳 たまも の裾に	140
六	旅ゆく吾を	178
七	潮もかなひぬ	213
	あとがき	243

一 天離る夷の荒野に

天離る夷の荒野に君を置きて
思ひつつあれば生けるともなし

227

縁側は長い歳月を経て黒光りし、開け放した硝子戸の下のレールにはとどころ錆びが見える。

由布匠ゆふしやういち一は、その縁側の、これまた古びて茶色に鈍く光る籐椅子に腰を沈めて、初夏の昼下がりの陽を静かに浴びている広い庭を眺め渡した。

芝はすり切れ、中央の部分は黒土がむき出しで、隅の立木の周りには雑草が生い繁っている。そのむこうには小杉の生垣がめぐっているのだが、それもとどころに隙間ができていて不揃いである。

花とはいえば、何本かの躑躅つづじの花がそろそろしおれかけており、それに代っていくつかの紫陽花あじきの群れが、しつとりと、それでいてあでやかな花を結び始めているのが救いで、ほかにはこの庭には何の造作もない。

「むさ苦しい庭でしょ」

「いや、こういう風情がぼくは好きですよ。自然に任せた感じで気が休まる」

「ご無理をおっしゃって」

「いや、ほんと」

「女手だけなもんですから」

「それはどうかな。反対に男手だけだったら、かえって目も当てられない荒れ方じゃないですか」

由布のことばに、荒巻田津子はクククと笑った。

「あじさいがきれいだ」

「勝手に咲いてくれるんです。そして勝手に七変化」

「え？」

「あ、花の色が変わっていくでしょ」

「あ、そうか……。ところで、紫陽花と書いてなぜあじさいと読めるんですか」

「知りません。私にお聞きになっても。由布さん、紅葉と書いてなぜもみじと読めるんですか」

「知りませんよ。僕に聞いても」

今度は二人で笑ってしまった。

「あの高い木は楓ですか」

「ええ、もみじ」

「あれ、楓がもみじですか」

「そうのです」

「ははあ、僕も秋の紅葉こうようのときに見たんだったら、楓かえでなんて言わずに、やっぱりもみじと言ったかも知れない」

「あの木の方角が西になります」

「ほう」

「祖父がここの地所を買ったときに若木を植えたんだそうです。夕日に映える紅葉を楽しみたいって」

「なるほど、それで西に。でも、その頃に若木だったとしたら、お祖父じいさんはごらんになれないまま……」

「そうだと思います」

田津子の話に出たので、由布はそろそろ、荒巻家を訪ねた目的の「祖父」の一件に話題を移そうとすると、田津子がまた口を開いた。

「さっきの由布さんのことばの感覚って、正しいと思います」

「え？ 何だっけ」

「紅葉してたら、もみじと言っただろうって」

「ああ」

「万葉集の歌を思い出しました。」

わが宿に　もみつかへるで　見るごとに　妹を懸けつつ　恋ひぬ日はなし」

「知らないな。だれの作ですか」

「大伴田村大嬢おおいづめ」

「何巻にありますか」

「巻の八だっと思ひます。ちよつと持つてきましょう」

廊下に向かう田津子の後姿に目をやりながら、由布は、これから始めようとする調査探索を少し負担に感じ始めていた。田津子が万葉集を好きだとは聞いていたが、一般にあまり有名でない歌が、こうすらすたと口から出るとは思つていなかった。田津子の祖父の万葉集事件を聞いて以来、由布もあらためて万葉集を読み直し始めてはいるが、田津子のほうがずっと身についているようだ。

（これでは、おれが事件の探索を進めるうちに、彼女はおれの万葉集の知識の程度を知つて輕蔑し始めることだらうな。それにしてもどうして、彼女はおれのことばの感覚が正しいなどと言つたのだらう）

などと思つてゐると、田津子が本を抱えて戻つてきた。

「わりあい新しい本ですね。それはお祖父さんの使つてらしたのじゃない」

「ええ、これは私が買ったんです」

田津子が開いたところを、由布は手に取つた。

〔二六三〕吾屋戸^{わがやど}尔^{にも}黄變^{みつかへる}蝦手^{でみる}毎^{ごと}見妹^{いもを}乎^{かけつ}懸管^{こひ}不^ぬ戀^ひ日者^{はなし}無

私の屋敷に紅葉している楓を見る毎に、いとお前のことを思い浮かべて恋い焦がれていない日はない。

「ね、もみつかえるでの万葉仮名が、黄変蝦手なんです」

「なるほど、葉っぱが蛙の手みたいだから、かえるで、かえで。そして、もみつがもみじになったのか。そうすると、はじめのもみじは紅葉じゃなく、黄葉ですね」

「ええ、もみじに紅葉の字を当てるようになったのは平安時代になってからだって、何かに書いてありました。はじめは、もみつとか、もみづとか、黄や紅に色が変わるさまを表わしていたようです。だから、黄や紅になった楓がもみじ。ですから、由布さんの感じ方は正しいんです」

「そうなりますか」

由布は苦笑しながら、田津子の万葉集の読み込みに舌を巻いていた。

「そうすると、さっきあなたが七変化と言った紫陽花も、もみつあじさい、なんてどうですか」

「さあ、それは……」

田津子は由布の冗談の気分を感じ取ったらしく、由布と眼を合わせて含み笑いました。

「考えてみれば、僕たちはいいつも何気なく、紅葉をもみじと読んだり、紫陽花をあじさいと読んだりしてるけど、日本語の漢字の当て方は融通がききすぎの感もありますね」

「そうですね。万葉集を見ると、そういうのが沢山ありますね。地名でも、大和がやまとでしょ。山戸ならわかりますけど」

「うん、武蔵がむさし。むはわかるけど、蔵が、さしとはね」

「飛鳥と書いて、あすか」

「と思うと、飛鳥の明日香、なんて読み分けたら」

「木綿は、もめんだったり、ゆふだったり……あら、由布さん」

「いいことに気がついてくれました。僕はペンネームを木綿匠一と変えようかな」

「いいかんじですね」

「今のは、感じですか。それとも漢字ですか」

「両方です」

由布は田津子とのやりとりを楽しさを感じながらも、このまま万葉集についての話題が進めば、田津子にたちまち太刀打ちできなくなるだろうと焦り始めていた。それで、しばらく口を閉じて庭の黒土に目をやった。田津子も黙り込んだ。二人はそうして籐椅子に体を預けたままだった。静かである。都心の一角とは思えないほどだ。自動車がひっきりなしに往き来する大通りから

いくらかも引っ込んではいないのに。

由布は、万葉集の話題から一旦逃れようとするかのように言った。

「このあたりは意外に静かですね。都心の住宅地を見直しましたよ」

「さあ、うちだけでも知れませんか」

「お母さんと二人だけだから」

「いえ、家も庭もこのとおり古いでしょ。古い材木や立木はね、周りの音を吸い取っちゃうんです」

「まさか……そんな話は聞いたことがない。それも何か万葉集にあるんですか」

「知りません」

田津子は由布の顔を見て、またクククと、特徴のあるいたずらっぽい笑みを洩らした。由布もそれに合わせて笑いながら、田津子の言ったことがまんざら冗談ばかりでもないという気に襲われた。古い家屋敷、母と娘の女二人住まい、そしてここは、田津子の祖父が非業の死をとげた場所である。ただの静寂ではないようにも思えてくる。

ここに来るのに、由布は田津子に電話で教えられたとおり、山手線の代々木駅で降りて、休憩時間で若者が道端まで溢れている大きな予備校の脇を通り抜け、大通りを歩いて小田急線のガードをくぐり、すぐ右に折れた。道はゆるやかな切通しの登り坂になっていて、行手には新宿西口の超高層ビルの群れが意外に近くそびえて見えた。そうすると、坂を越えていくからも歩かぬうちに甲州街道に出てしまうはずだ。あの街道の交通量の多さは由布も知っている。

大通りと大通りに挟まれたこういう住宅地は、さぞうるさいことだろう。由布はそう考えながら、頭の中に描きとどめた地図を辿って路地を折れ、荒巻家を探した。そのあたりは、新建材を使ったクリーム色の家、木目の新しい木造の新築家屋、それに白っぽいコンクリートの三階建のマンションという三種類の住宅が、まるで勢力争いをしているように立ち並んでいた。その一角

に、小杉の生垣に囲まれた古い木造の平屋があった。敷地はかなり広く、風雨にまみれた木の表札の墨の痕は、かろうじて「荒巻寓」と読めた。

そして家の中に招じ入れられて庭に面した縁側に落ち着いてみると、あたりは森閑としていて、すぐ近くの大通りを疾駆しているはずの自動車の音ひとつ聞こえないのだった。

「古い材木や立木は周りの音を吸い取ってしまう」——由布は田津子のそのことばから、最初にこの家に入ったときに受けた感じを思い出していた。そしてそのことばに促されたように、やっと荒巻家訪問の本題に入っていた。

「さてそれで、お祖父さんが特高警察に引つ張られたのは、本当に万葉集の研究と関係があるんでしょうかねえ。ほかには原因は考えられないとおっしゃいますが」

「ええ、第一、万葉集でにらまれるということからして考えられないことなんですけど。だからほかに原因があったと思ったほうが、よっぽどわかりやすいんですけどね。それが全然わからないんです」

「それにしても何か手がかりがありそうなものですけどねえ」

「本人の残したものは何もなかったそうです。それに祖父は、有名人でも大物でもありませんでしたから、ほかの方が記録したものも何一つありません。おまけに、さんさん痛めつけられても起訴まではいかなかったの、公判記録もないし」

「そうなると、やっぱり、亡くなるまえにお祖母^{ばあ}さんがお聞きになったという、ひとことふたことだけ」

「そうなんです」

それは、死ぬ間際に病床で洩らした、「万葉集が命をちぢめた」とか、「人麻呂と心中だ」とかいう、つぶやくようなことばだけだったというのだ。

「日記とか研究資料のようなものも残ってないのですね」

「ええ、万葉集についても、蔵書が少しあるほかは何もないんですよ。多分、押収されたままになっただけでしょうね」

「それにしても、万葉集と治安維持法とはねえ」

由布はあらためて首をかしげた。そして、荒巻田津子に興味を持ったのに釣られて、自分の力の遠く及ばぬ難しい問題の調査に乗り出したのではないかと後悔した。

(このお調子者)

内心でそうつぶやいた。

由布は、本来はスポーツものを得意とするルポライターである。五年ほどまえに出版社勤務をやめ、今は「スポーツグラフィック」という月刊誌の嘱託として一定の記事をこなすほかは、フリーの仕事が主である。

最近で評判のよかったのは、女子バレーボールでロサンゼルス・オリンピックの日本代表になると目される選手のうち、若いアタッカーとセッターの二人に的を絞り、その生い立ちから今日までをまとめたもの、それに、伝統的な風習の強い相撲界で、新しい部屋づくりに情熱を注ぐ一

人の若い親方のインタビュー記事である。そして七月下旬には「スポーツグラフ」の特派で韓国に行くことになっている。発足して二年目の韓国のプロ野球と、ロサンゼルス次のソウル・オリンピックの準備の様子を取材するためである。

その由布が、スポーツとは縁もゆかりもなさそうな、母と二人住まいの荒巻田津子の家を訪れることになったきっかけは、三日まえの高校の同窓会だった。

その日の同窓会は、旧制中学の時代から現在までを通して、卒業年度を問わず、すべての在京同窓生に案内が出された会合だった。

由布の出身高校は、北九州市小倉区にある福岡県立豊前^{ぶぜん}高等学校である。歴史は古く、明治十八年に豊前中学校として創立以来、さ来年の昭和六十年には百周年を迎える。そこで地元で創立百周年記念事業が計画され、在京同窓生への趣旨説明と協力要請のために、同窓会長と校長が小倉から上京するという大がかりなものとなった。そのため、会場には日比谷にあるホテルの大広間があてられた。

卒業以来たびたび集まって気心の知れている同学年の連中だけでなく、顔も知らない大勢の先輩や後輩に挟まれる様子を想像すると、由布はいささか億劫になった。それに、いつもは同窓会というと、ちょっとした料理屋の二階あたりを借り切って、いつのまにかあちこちに車座ができ、膝つき合わせて飲むのだが、今度はホテルの大広間で当然テーブルと椅子だろう。いろんな人のスピーチをかしこまって聞き、ウェーターやウェイトレスのサービスをぎこちなく受ける。金屏風に厚い絨緞、壁面の豪華なレリーフ……服装までそれに合わせて考えなければいけない気にな